

2013年春休み友情のレポーター カンボジア取材レポート

後藤 要（岐阜県／当時 13 歳）

僕は今回、春休みに友情のレポーターとしてカンボジアに行きました。

一日目から三日目まではまともにレポーターとして働くことが出来ましたが、四日目から体調を崩してしまいました。

第一日目

成田国際空港から飛び立った飛行機の中で、僕はドキドキ感と緊張で満たされていました。カンボジアにつき飛行機から出た瞬間そのにおいにびっくりした。なんだろうクッキーの焼けるにおいというか、サウナのようなというか……。まわりは蒸し暑く、手に汗がにじむ。

はじめてのカンボジアの印象はクッキー臭とサウナだった。

第二日目

朝、ホテルでソッチェン・ソットラン・バラ・スレイピアップに出会いました。初めはみんな緊張していて、名前もおぼえられませんでした。みんなすぐに仲良くなりました。

一緒にカンボジアが持つ世界遺産、アンコールワットに行きました。その歴史の持つ迫りに圧倒された僕。遺跡が持つ力は恐ろしく大きかった。ヒンドウの神話をもとに造られた壁や高い塔はまるで僕らを見下ろすようにそびえていた。そこではみんな一人一つずつカメラを使って沢山笑うことができました。みんなの笑顔がとても素晴らしかったです！

第三日目

バイヨンに行ってまた写真をたくさん撮りました。お互いの写真を撮りあったり、綺麗な観世音菩薩の顔と一緒に写真を撮ったり……。しかしいつまでも楽しんでいる訳にはいきません。バイヨンで取材することにしました。聞いたことは、全部で三つ。

○年齢は？

○あなたは何年前に若者の家にきましたか？

○その前はどこで何をしていましたか？

しかし、たくさん質問をふくらまして考えるのがすごく難しいし、緊張して巧く喋れませんでした。ソットランやソッチェンの過去の話の少し聞き出すことができました。でもやはりどこまで聞いてよいのかが分からず、困ってしまい深いことまでは

聞けませんでした。くやしかったです。

この日のお昼にソットラン達が住んでいる若者の家に行くためにバッタバンに行きました。何人かの子がバレーボールをやっていました。若者の家ではソットラン達の部屋や男子のシャワー室を見ました。部屋は四人部屋で2人で一つのベットを共有するのです。ソッチェンにはバレーボールに誘われたのですが、時間がなく泣く泣く誘いを断りました。

KnKの若者の家は、子どもたちが一時的に居住する施設ではなく次のステップへの足がかりであることがわかりました。それを知り、僕が持つ若者の家のイメージが明るい所になりました。生活している子たちはみんなにこにこの笑顔です。

第四日目

今日は朝から若者の家に行きました。まずは日本紹介の準備の為に折り紙で手裏剣を作りました。

はじめは僕と涼香さんで作っていたのですが、気がつくともとても沢山の子どもたちが参加していました。織り方が伝わらず、大変だったし自由人のソッチェンは何か別のものを作っていました。みんなとても楽しそうでした。

ソットランはバードと言いながら鶴を折って見せてくれました。その鶴は日本のと変わらず、世界共通なのかな？と疑問に思いました。

折り紙を折っていたら少しだるくなってしまいました。暑いからかな？と思っていたら気持ち悪くなってしまい、少しだけ休憩することにしました。

少し休憩をして、体調が良くなったのでみんなの所に行きました。

みんなは涼香さんが持ってきていた名札を付けていました。僕も名札を貰うと、ソッチェンが嬉しそうに名札の裏に僕の似顔絵を描いてくれました。うれしかったです！

次にバルーンアートをしました。

僕「このバルーンが何になると思う？」

みんな「長いね！」

僕「うん。」

微妙に話がかみ合っていないのは気のせいでしょうか？

そんな感じで話してから、みんなの前で犬を作りました。あまり上手くできず、不格好でしたが割れなくてよかったです。

作ってみたい人！と呼びかけたところ、まばらに手が挙がりました。ソッチェンと一緒に、みんなに説明しました。僕のは途中で割れてしまいましたが、ソッチェンは巧くできて良かったです。

みんなが楽しくバルーンアートや折り紙で遊んでいる間に僕らは忍者服に着替えました。忍者服を着ながら打ち合わせをしつつ、みんながどんな反応をしてくれるのかドキドキです。

あきさんの「日本から忍者が来てくれました！」と紹介の後、僕らは日本から用意してきたストローの吹き矢を使い、忍者の説明をしました。

一通り説明を終えると、全部で四着ある忍者服を昨日一緒にアンコールワットに行った四人組に着せてあげました。みんなすごくうれしそうで、今すぐにでもみんなの前に行きたそうでした。

ついでにソッチェンとソットランには画用紙で描いた的をお腹にセロハンテープではりつけました。すると綿棒やら手裏剣やらが的に向かってたくさん飛んできました。的があると当てたくなるのは世界共通なのでしょうか？

つぎに小野田さんが日本から持ってきたサッカーボールとサッカーシューズの贈呈式がありました。そのサッカーボールとサッカーシューズは日本の子どもたちがアジアの子どもたちにサッカーを楽しんでほしいと、寄付してくれたものばかりです。そんな色々な思いが詰まったサッカーボールでみんな早速サッカーをしています。

僕はソッチェンとソットランと一緒にバレーボールをしました。みんな毎日やっているの、とても上手で僕は手も足も出ませんでした。しかし、僕が何回失敗しても笑顔でNo Sorryと言ってくれるみんなの優しさに僕は胸が熱くなりました。

一通り日本紹介が終わると食事会・・・なのですが僕は体調がまた悪くなり、もう一度休憩です。

一時間程度一人で横になっていたのですが、途中何回か若者の家の子たちが来てくれました。「大丈夫？」的な事を言ってくれているらしいのですが、全く解らず悔しかったです。しかし、僕には「旅の指さし会話帳」がありました。その中から病気、トラブルのページを探して話してみました。

「リアック（下痢だよ）」

「大丈夫？」

「あまり・・・」

少し会話ができました！感動です。

僕が出れなかった食事会の次は歓迎会です。僕はゴールデンボンバーの女々しくてを踊るつもりでしたが、結局病気で踊れず、出し物を全て涼香さんに任せてしまいました。せっかく練習や打ち合わせもばっちりしていたのにできなくてとても悔しいし、涼香さんには全ての負担をおわせてしまい本当に申し訳ないです。しかし、最後に一度復活して踊ることができました。ステップが難しかったです。

第四日目

この日は朝、少し体調が悪く取材が出来なさそうなので午前中ホテルで休憩していました。すごく悔しかったのですが、また午後にも出来ると思っていました。

迎えた午後、ソットランの自動車工場に取材に行きました。そこで取材をしようと思ったらお腹が痛くなりダウンしてしまい車の中で寝ていました。

一時間程度だったでしょうか。取材が終わりホテルに戻ると清水さんが病院に行こ

うと言い、バッタバンの病院に行き、採血（痛い）、エコー（器材で痛い所をグリグリしてくる）など酷いことをされた上に入院することになってしまいました。

その晩、あきさんと二人で病院の部屋に泊まりました。覚えてないけど水道が壊れて部屋は水浸しになったそうです。

第五日目

朝、15分おきくらいに右のお腹がとても痛くなるという最悪の目覚めでした。もう少し大きな病院に行って検査をするそうです。

救急車に乗って搬送されたのはバッタバンのもう少し大きい病院でした。そこでも痛い採血に、グリグリしてくるエコー、痛すぎる触診が待っていました。相手は真面目かと思いきや笑っていました。ひどい……。しかし、なんと病室に若者の家のみんなが来てくれました！

“指さし会話帳”を使って色々な会話をしました。遊びの事、恋人の事、ご飯の事……。

すごくうれしかったです！

夜、涼香さんや清水さん、吉崎さん、ドミニクさん、ソッチェンが部屋に来てくれました。

診断結果がでました。分からないのもっと大きい病院に行くとのこと。やっと外れたのにまた点滴を打たなければなりません。しかもお腹がへってます。2日間何も食べてません！！

4時間ほどで来てくれたお医者さん達に（今度は上手な）注射を打たれて、点滴の管を入れられました。

その後、救急車でシェムリアップの病院に行きました。時速100kmは余裕で出していたようで、凄い揺れて丁度痛い時に着地し、涙が浮かびました。2時間ほどで着いた所から、相当急いでくれたようです。その後は歯をみがいてお休みです。

第六日目

今日は朝からCTスキャンを撮ったりと大忙しです。少し待ってからお医者さんがきて、多分盲腸ではなく、アメーバ赤痢だろうということですが、念のためタイのバンコクの病院にも結果を聞いてくれているそうです。

こんなところからカンボジアの現実が見れます。最初の病院でも、ベトナム人のお医者さんでした。カンボジア人のお医者さんになるのは難しいそうで、学校に通えない人も多く、カンボジア人のお医者さんはあまりいないのです。

この日の昼には3日ぶりのご飯を食べました。おかゆで、とても美味しかったのを覚えています。しかし空っぽだった胃にいきなり物を入れたせいかお腹がすごく痛かったです。この日もまだ退院することはできませんでした。

第七日目は覚えてません。

第八日目

ついに今日退院することが出来ました！辛かった入院生活からやっと解放されるのです。最高です！

早速ホテルに移動し、動きだ・・・せませんでした。まだ病み上がりです。

夜までホテルで少し休憩し、マーケットに行きました。何でも売っていてビックリです！

たとえば帽子とか服とかヒスイの置物に真鍮製のライター、有名時計のパチモノ・・・しかし僕はお金を持っていなかったの、何も買わずそこを後にしてFCCに行きました。FCCとは昔、ポルポト時代に記者達が情報交換をしていた場所で今はレストランになっています。

FCCでロウさんとシナットさんに会いました。ロウさんとシナットさんは若者の家の卒業生です。

2人は取材が出来ない僕の為に話をしてくれるそうなのですが、明日涼香さん達がこっちに来るのでその時にすることになりました。僕たちはそのあともFCCで色々な事を話しながら食事を取りました。

第九日目

昼間はぶらぶらとマーケットで買い物をしました。色々なものを値切ったり見たりして、楽しかったです。

夕方、涼香さん達とロウさん、シナットさんがホテルに来ました。取材の始まりです

シナットさんは七歳の頃、家庭が貧しく、父親の家庭内暴力がさらに酷くなり、親に家を追い出されて路上で生活するようになったそうです。路上で生活していて、大人が怖かったと言っています。

路上で考えていたのは勉強の事。学校をやめてしまい、ずっと勉強をしたかったと。

しかし、15歳の頃KnKの若者の家に来ないかと話を持ちかけられたそうで、2週間ほど勉強はできるのか、自分はストリートチルドレンだったけど仲良くしてくれるのかを悩んでいたそうです。

しかし、悩んだ末に入ることを決めました。入った初日、若者の家の子どもたちは自分を気遣い、またいろいろ話かけてくれて、とてもうれしかったそうです。

一通り取材を終えたのですが、体調を崩しシナットさんの取材だけになってしまいました。もう帰るために飛行機に乗らなければいけません。

シナットさんやロウさんに別れを告げ、飛行機に乗り込みました。まだやりきっていないことが沢山あるので、正直帰りたくなかったです。

こうして僕のカンボジアの取材は終わりました。

僕はカンボジアに行っているいろいろな現実を見てきました。若者の家の子たちはみんなここでの生活で辛いことは何一つもないと言っています。それは若者の家に来る前には辛い事が沢山あったけど、ここでは前の暮らしではできなかった教育や職業訓練が受けられるからだと思います。

ここを卒業したらロウさんやシナットさんのように自立した生活ができる、そんな卒業生たちを目標にしているから、家族と離れて寂しくても笑顔で生活できるのだと思います。

また、僕と同年代の子どもたちがとても沢山苦労していることも分かりました。アンコールワットでは6歳とか7歳ぐらいの子が物売りをしていましたし、10歳ぐらいの子が小さい子どもの世話をしていました。観光客が通りかかると、近寄ってきてうれしそうに品物をさし出します。「NO」と断ってもなかなか諦めてくれません。彼らはその品物に生活がかかっているのですから真剣そのものでした。買ってあげられなくて申し訳ないし、その姿がとてもかわいそうに見えました。

ロウさんの月収は400\$だそうです。それはカンボジアの中ではとても高月収で、25\$程度の人もいるそうです。日本との差は10~100倍だそうですから、普通に働いてこの差なら毎日働き続けている子どもたちはどの程度なのでしょう。

しかし、僕は自分でお金を稼がずに生活しています。それにお小遣いも貰っています。自分がすごく恵まれた環境にいることを今回学びました。

僕はこれからほんの少しだけど、見てきたことを学校や色々な場を自分で用意して発信していきます。

また、引き続き学校やボーイスカウトなどで募金の活動を行って行こうと思います。そのお金で少しでも子どもたちが、今より良い暮らしを手に入れられるようになるために頑張ります。

また、僕がカンボジアに行ったら思ったことは、言葉の大切さです。行く前は笑顔さえあれば身振り手振りで大丈夫だと思っていましたが、実際に行ってみると現実は違いました。みんなが何を言っているのか分からずお互い困ってしまいました。それにお医者さんや看護婦さんが何を言っても、ドミニクさんとあきさんがいないと言葉が分からず、お医者さんも困ってしまいました。このことから言葉は大事なのだなと実感しました。これからは英語を話せるようになるために、授業を今以上に頑張ってお受けします。

僕は将来、世界の子どものために支援活動を行う人になりたいです。今よりももっと勉強をして、もっとたくさんの現実を見て知らせて頑張ります。しかし、その前にもう一度カンボジアに行くと心に決めました。

僕は日本に帰ってきてから考えました。カンボジアの事、若者の家のみんなの事、シナットさん、ロウさんの事、そして自分の来た理由について。僕は正直ストリート

チルドレンやトラフィックチルドレンについて取材できていない。それなのに帰るなんてとても悔しかった。絶対にまたカンボジアに行って、全てやるぞ！と心に決めました。

最後に、今回たくさん迷惑をかけてしまったスタッフの皆様、レポーターとしての活動を全て任せてしまった涼香さん、本当にすみませんでした。そして、支えて下さりありがとうございました。

将来、世界中の全ての国が、若者の家のような施設の要らない先進国になってほしいと願いながら、このレポートを終わります。

2013年春休み友情のレポーター 後藤 要

2013年春休み友情のレポーター カンボジア取材レポート

水谷 涼香（神奈川県／当時 14 歳）

カンボジアに行って、自分は何か変わることが出来たのだろうか？

3月28日（1日目）

いよいよ出発の日！

大きい荷物を持って歩くのは慣れなくて大変だったけれど、それと同時に「これから本当にカンボジアに行くんだ！」と期待が膨らみました。これから行く、自分の知らない世界、新しい出会いが楽しみでしょうがありませんでした。

空港でスタッフの方に意気込みを聞かれ、私は「沢山友だちをつくりたい」と答えました。

やりたいこと、思いつくことが沢山あったけれど、自分は「友情」のレポーターであるからこそ、こう答えました。友だちだからこそ、知ることができる真実、心境、そんなものがあるのではないかと思うし、何より友だちと一緒にいると楽しいから！

長い時間、飛行機に乗って、やっとカンボジアに到着！飛行機を降りると、サウナのような暑く、ムシムシとしている気候にびっくり！ただ、じっとしているだけでも汗がダラダラと垂れてきます。夜でこんなに暑いなら、昼はどうなってしまうのだろうか…？

カンボジアの人にクメール語で初めて「クニョン チュモ スズカ（私は涼香です）」と自己紹介をすると「スズカ！」と名前を呼んでくれて、自分のクメール語で相手に伝えることが出来たことが嬉しかったです。

車で空港からホテルに移動するときに、カンボジアの街並みを見ていました。カンボジアにはあまり信号がありませんでした。交通の規制もあまり厳しくないようで、入り混じるバイクと車。バイクでは3人乗り、4人乗りはあたりまえ、6人、7人で乗っている人もいました。

ボーッと外の景色を見ていると…すると、なぜだろう…？なんだか静かでなごやかで、日本と変わらない安心感がありました。住んでいる人々も、発する言葉も、使う文字も違うのに体がすんなりとその地域に入っていくようでした。今、思い出しても不思議な感覚です。けれど、それまでの自分は海外、外国というものを、言葉のように遠く離れたところ、違うところ、と何処かラインを引いていたような気がします。実際

に来てみると、そんなことはないのかもしれませんが。

3月29日（2日目）アンコールワット観光

KnK の若者の家で暮らす女の子のパラ、スレイピアップ、男の子のソッチェン、ソットランの4人に初めて会いました。最初はとても緊張しました。私はクメール語がわからない、相手も日本語はわかりません。そのような状況でどのように相手と会話をしたらいいのか、通じ合うことができるのか、と言葉の壁、国境の壁を作っている自分がいました。けれど、それは最初だけ。

パラとスレイピアップは「スズカ！スズカ！」と私の名前を沢山読んでくれて、自然に打ち解けることができました。壁を壊してくれたのは、4人でした。

アンコールワットに着くと、沢山の観光客、壮大な自然「さすがアンコールワット！」というべく私はその姿に魅了されてしまいました。アンコールワットは世界遺産で観光地としても有名です。カンボジアの国旗にも描かれるアンコールワット、国民にとっても大切な遺跡なのでしょう。一直線の道の先にそびえたつ、古くも力強く美しいアンコールワット。ロウ（KnK の若者の家の卒業生）がガイドとして、アンコールワットを案内、そして、それぞれの遺跡の意味や、彫刻に描かれている物語など詳しく説明してくれました。

アンコールワットでは、みんなにカメラが渡されて写真大会を行いました。みんな写真を撮って、見て、とても楽しそう！！「こっちこっち！！」とジェスチャーをして一緒に写真を撮ったり、一緒にポーズをとったり。たくさん笑って、楽しいあつという間の時間でした。

その日は、4人も一緒にホテルに泊まります。ホテルに戻ってみんなと一緒にプールに入りました。とても暑いのでプールの水が気持ちよかったです。

夕飯も一緒に食べました。私はスレイピアップと一緒にチキンライスを頼みました。飲み物も「OK？」と聞いて私の分も頼んでくれました。とても頼もしくて、優しくて、姉のような存在です。

ホテルの部屋に戻ると、アンコールワットで行った、写真大会の結果発表！同じところを観光しているのに、写っている写真はみんなそれぞれで個性が溢れていました。お互いの写真を見て笑顔になる、写真には、そんなパワーがあるように感じました。優勝したのは「パラ！！」。パラには KnK から大きいスノードームがプレゼントさ

れました。そして、私たち全員にスノードームをプレゼントしてくれました。キラキラしていて素敵で今も部屋に飾ってあり、それを見るとカンボジアでのことを思い出します。

結果発表が終わると、布団の上でまくら投げ！！みんなで飛び跳ねて、汗だくになって。

その日の夜まで、みんなで遊んでいました。「私たち6人はもう友達」とみんなに伝えると

ソッチェンが嬉しそうな笑顔で「じゃあ明日は親戚」と言いました。言葉の壁はない、国境の壁はない、強くそれを感じた1日でした。

3月30日（3日目）アンコール・トム バイヨン観光

早起きをして、パラとスレイピアップとおしゃべりをしていました。その時、お互いの似顔絵を描いて、簡単な英語のメッセージをつけて、プレゼントしました。2人とも、私の似顔絵を描いてプレゼントしてくれました。

アンコール・トムに行く途中の車の中でスレイピアップのしている指輪を「素敵だね」と言うと、ピアップはその指輪をはずして、私の指にはめてくれました。ピアップの気持ちがとても嬉しかったです。その日からずっと大切に指輪をつけていました。

アンコール・トムに着くと、目の前に大きなゾウが！！どうやら観光客の人々を乗せているそうです。とても大きくて、ゾウをこんなに近くで見るとは初めてなので、迫力がありドキドキしました。乗ってみたかったけれど、ゾウが休憩に入ってしまったので乗ることはできませんでした。残念…。

アンコール・トムは高く積み上げられた石に、彫刻が掘ってある迫力のある寺院でした。その沢山積み上げられた石の4面に顔が掘ってあり、（観世音菩薩の顔）、なんだかどこにいても見られているような感覚になりました。クッと口角の上上がった表情は優しく、かつ奥深く感じました。

◎パラとスレイピアップに初めてのインタビュー

アンコール・トムの観世音菩薩に見守られながら、パラとスレイピアップに初めてのインタビューをしました。正直、インタビューをするのが怖いと感じていました。会ってまだ2日目なのに、相手を傷つけてしまわないか、嫌な思いをさせてしまうのではないかと不安になりました。

パラとスレイピアップは家族のもとを離れて KnK の若者の家で生活をしています。

若者の家に来る前はホームランドという別の施設で生活をしていました。それぞれ、事情があり家族のもとを離れ施設で生活をするようになったのでしょうか。けれど、14歳位の年齢でホームランドからは出なくてはなりません。しかし、14歳位の年齢で働いて、お金を稼いで生きていく「自立」というのはとても難しいことです。もし、今の自分が1人で社会に出されたら、どうすることも出来ず、体も、心もボロボロになってしまうでしょう。

KnKはそのような子どもたちに学習の場や、職業訓練の場を設けています。そのためホームランドから、KnKの若者の家に来たと言います。彼女たちは今、若者の家での生活がとても楽しいようです。一緒に同行してくれていたKnKカンボジアの事務局長のサカンさんについて、「どんな存在？」と尋ねると2人とも「お父さんのような存在」と笑顔で答えてくれました。

そんな、今を一生懸命、前を向いて生きている彼女たちを強く、カッコいいと思いました。それと同時に、今、彼女たちは強く、前を向いて生きている、それなのに自分が過去のことを聞いていいのだろうか、そんな気持ちが込み上げてきました。なぜ、ホームランドで生活をするようになったのか、など過去のことを聞くのをためらってしまいました。

◎要がソッチェンとソットランにインタビュー

初めてソッチェンの年齢を15歳と聞いたとき、驚きました。私よりも小さく、もう少し年が下かなと思っていましたからです。話によると、ソッチェンは成長期にあまりご飯が食べられず栄養が十分でなかったからだそうです。

ソッチェンは1月に若者の家に来たばかりだそうです。若者の家での生活は、とても楽しく今は学校に通っているそうです。学年を聞くと、ソッチェンは小学5年生だと答えました。15歳で小学5年生…。日本ではない現実にショックを隠せませんでした。きっと何年かの間、金銭的な面でも学校に通うことができなかったのでしょうか。けれども、年齢の差を気にせず、一生懸命学習に取り組むソッチェンの姿はとてもたくましく、強く感じました。

ソットランは今、19歳で、3年前から若者の家で生活をしています。1年前までは学校に通っていたが、家族を助けるために手に職が欲しくて、自動車の職業訓練を行っています。1年前、学校をやめた時、ソットランは中学3年生でした。けれど自分より年上の子もいた、と話してくれました。ソットランは若者の家に来る前にはおじさんと一緒にタイで漁業や、おじさんと離れ、ペットボトルのリサイクル会社で働いていたそうです。けれどタイには不法な形で侵入をしていました。ソットランは警察

に捕まり、保護された先で KnK の若者の家の存在を知り、そこで生活することを決めました。

正直、すごく衝撃でした。

車で KnK 若者の家があるバタンバンに移動。車の中ではカンボジアの歌を歌ってくれてり、日本の歌を歌ったり、とてもにぎやかでした。車の窓から見える景色は、一面に広がる草原。信号はなくまっすぐと続く道、綺麗でした。だんだん景色がにぎわってきて、家やお店が増えてきました。家は木で造られた高床のところが多くありました。途中には牛が道路を横断するなど、日本では見ることのできない光景にドキドキでした。そして、若者の家に到着。するとソッチェとソットランが部屋を見せてくれました。4人で1つの部屋、2人で1つのベッドで生活をしていました。勉強机の周りには手書きの計算式や、言葉が貼ってあり、努力をして勉強に取り組んでいる姿が浮かんできました。

3月31日（4日目）若者の家で日本紹介&パーティー

若者の家まではトゥクトゥクという乗り物で行きます。トゥクトゥクというのはバイクの後ろに6人乗れる客席のついた乗り物です。初めてのトゥクトゥクは風がとても気持ち良くて乗り心地も最高でした。

若者の家の子どもたちに会えるのが楽しみでした！日本紹介では忍者の紹介をしたり、平仮名で名札を作ったりしました。

忍者の紹介をするために、折り紙で手裏剣を作っていると、周りにみんなが集まってきた一緒に手裏剣を折ることにしました。言葉で説明は出来ないけれど、一緒に折ったり身振り手振りで説明をするとみんな器用で上手に器用に手裏剣を折っていました。完成したときの笑顔が素敵で、自分まで嬉しくなっていました。みんなで作ったおかげで沢山手裏剣が出来ました。

忍者の紹介では、忍者の格好をして気合十分！！みんなで吹き矢や、一緒に作った手裏剣を投げ合って楽しみました。パラ、スレイピアップ、ソッチェン、ソットランの4人に忍者の格好になってもらうことに。忍者になった4人はかっこよく、きめてくれました。特に、テコンドーをやっているソッチェンはすばしっこくて、本物の忍者のようでした。

名札では平仮名で名前を書くのは難しそうだったけれど、自分の名前を一生懸命書いていました。名札のおかげでお互いの名前がわかり、呼び合うことが出来たので、と

でもよかったです。

夕飯も一緒に食べました。若者の家のみんなが「一緒に食べよう！」と誘ってくれましたので、みんなと一緒に食べました。みんなでおしゃべりをしながら美味しく、楽しく頂きました。カメラを向けられるたび「かんぱ〜い！」一体何回やったかな？

夕飯の後はパーティー！パーティーの準備をしているとき、ソッチェンが私にお花をプレゼントしてくれました。かわいらしいピンク色のお花。するとその花をスレイピアップが私の髪につけてくれました。なんだか温かい気持ちになりました。

パーティーで私は、日本の歌を歌いました。最初は緊張したけれど、みんなが手拍子をしてくれて楽しかったです。そして、体調を崩してしまった要の代わりにダンスを1曲踊ることに！！ダンスなんて踊れるかな、と少し焦ったけれど、小学校まで歌を習っていたのでそこで習った簡単なフリ付きの曲をみんなで歌って踊ることにしました。その歌は「フルーツサラダの歌」明るい曲なので、みんなノリノリで、楽しく踊りました。みんな歌のフレーズが気にいったのか「ジヨリジヨリ〜♪」と歌っていました。

後で聞いた話、この歌はもともとフランスの曲だそうでドミニクさん（KnKの事務局長 フランス人）がとても嬉しそうにフルーツサラダの歌の話をしてくれました。

カンボジア×日本×フランスのコラボ！運命を感じました。

若者の家の子が歌を歌ってくれたり、カンボジアのダンスをしたり。カンボジアのダンスは手のひらを交互にひっくり返すような一見簡単に見えるダンスです。けれども実際に踊ってみると、手の動かし方、足の動かし方、と難しかったです。スレイピアップがずっと隣で教えて一緒に踊ってくれました。

若者の家の子どもたちは、とってもフレンドリーで明るくて、優しくてまるで初めて会ったとは思えないくらい！！とても楽しい一日でした。

4月1日（5日目）

午前中KnKの職業訓練や収入創出活動（IGA）取材しました。IGAとは、職業訓練を終えた青少年が生産者となり収入を得る活動です。たくさんの若者が自分の将来や家族を支えるために必死に仕事をしている姿がとても印象的でした。そこではKnKの若者の家で暮らさずに、家から来ている若者も多くいました。話を聞いてみると、職業訓練や収入創出活動を行っている彼らの家庭には、金銭的な余裕がありません。

●ラタン家具

◎IGAの生産者チャンドロー(20歳・男)にインタビュー

チャンドローは、若者の家から3キロメートルほど離れた家から、土日以外の毎日来てラタン家具の生産を行っています。チャンドローはラタン家具を作り始めて3年だそうです。(そのうち1年がトレーニング)ラタン家具の生産はどんどんスキルアップしていけることが楽しいと言っていました。ラタン家具の職業訓練を始めたきっかけは、家族にあげるお金が欲しかったからだといいます。ラタン家具はとてもオシャレで、すわり心地もバツグンでした！

●機織り

機織りの職業訓練の場所ではIGAの生産者として認められたけれど、訓練生とともに機織りをしている子がいました。その子は耳が聞こえず、しゃべることが出来ないそうです。そのため先生との距離が近い訓練の場で機織りをしていました。

◎職業訓練を行っているリニー(19歳・女)にインタビュー

リニーは機織りの訓練を始めて8カ月。訓練はとても楽しいと言っていました。けれども糸が切れてしまうなど大変なこともあるそうです。リニーも若者の家から2キロメートルほど離れた家から毎日自転車で来るそうです。リニーには母がおらず、そのため収入が少なくなってしまう。2人の妹を公立の学校へ行かせるお金を稼ぐために、手に職をつけたいと思い、この職業訓練を始めたといいます。

私も機織りを実際に体験させてもらいました。足場が不安定でとっても難しかったけれど、貴重な経験になりました。

午後はソットランの車の修理の職業訓練の様子取材しました。そこには、暑い中真黒になりながら、車の修理に取り組むソットラン、そして若者の家で暮らす子どもたちの姿がありました。ソットランは1年前に、家族を助けるために、手に職が欲しいと思い、学校をやめ、職業訓練を始めました。ソットランは若者の家で生活をしていて毎日7時から5、6時まで訓練を行っているそうです。オーナーさんの話では職業訓練を終え一人前の修理師になるには2、3年かかり、ソットランが一人前になるにはあと1年間くらいと言っていました。ソットランははやく一人前の修理師になって、自分のお店を持ちたいそうです。

4月2日(6日目)

午前にはパラの家に行きました。パラの家は若者の家からトゥクトゥクで1時間くらいの距離にあります。そこでは、パラの伯父、叔母、いとこが生活をしていました。決して行くことのできない距離ではありませんが、勉強などが忙しく、年に1、2回し

か帰ることは出来ないそうです。やはり帰ってくると、パラも伯父も伯母もいとも嬉しそうでした。「実家に帰ってきて、どう？」と尋ねるとパラは「とても嬉しい」と笑顔で答えてくれました。以前はパラもそこで生活をしていましたが、生活が苦しくなり、勉強をするためにホームランドという施設に行き、その後 KnK の若者の家に行くことを決めました。その決断はパラの伯父、叔母にとっても、パラにとっても大きな勇気のいる決断であったと思います。今、パラは会計士になる夢に向かって一生懸命勉強をしています。そのため、「家を離れることは寂しかったけれど、後悔はしていない」と言っていました。

午後はソッチェンの家に行きました。ソッチェの伯父、叔母、いところが生活している家は、若者の家からすぐ近くにあり、会いたくなかった時には自転車で会いに来るそうです。この日も1週間前にここを訪れたばかりだそうです。ソッチェンの両親は病気で亡くなってしまったため、若者の家に来る以前はそこで伯父、叔母、いとことともに生活をしていました。けれども祖父の収入で家計を支えるのが厳しくなりソッチェンを学校に通わせ続け、勉強をするために若者の家で生活することになりました。

その次は、ソッチェンの兄の家に行きました。ソッチェンは若者の家を出るときから兄に会いたがっていて、家が近づいてくると身を乗り出して景色を見たり、笑顔だったり、そわそわした様子。兄に会うのが本当に嬉しいのだなというのが伝わってきて、私まで優しい気持ちになりました。兄の家に着くとソッチェンはトゥクトゥクを飛び降りて家に走って行きました。ソッチェンの兄は今20歳で、携帯の修理について勉強し、今は自分のビジネスを作っています。マーケットの一角に自分の家を持ち、生活をしています。はやくに両親を亡くしたソッチェにとってお互いの存在はとても大きなものでしょう。兄に「ソッチェンとの思い出は？」と尋ねると「普段のたわいのない会話」と答えてくれました。

4月3日（7日目）

午前中にバタンバンの刑務所に行きました。刑務所という場所には日本でも入ったことがないので少し緊張しました。刑務所は罪を犯した人が生活をしているところ、私の中では「暗い、笑顔のないところ」そんなイメージがありました。けれども足を踏み入れてみるとそのイメージとは全く違っていました。目が会うとニコッとほほ笑んでくれて嬉しかったし、ホッとしました。それと同時に、「なんでこのような優しい心を持つ人が、この場所にいるのだろうか？なぜ罪を犯してしまったのだろうか？」とも思いました。

全ての人が、というわけではありませんが、中には生活が貧しくて万引きなどの犯罪に手を出してしまう、ということも多くあるそうです。とても悲しい現実です。

KnK は刑務所に入った人々が刑務所を出た後に自立出来ることを目指して、刑務所

内でのサポートも行っています。縫製の訓練と学習（識字、英語、絵画）を行っている様子を見せてもらいました。縫製では、大勢の大人(女性が多い)が訓練をしていました。週に2, 3回訓練を行っているそうです。

バタンバンの刑務所では未成年のみしか学習を受ける権利はありませんでした。実は4日(次の日)もポイプトに向かう途中に刑務所があるということで見学させてもらいました。ほとんどの雰囲気は似ていて、畑仕事、縫製、学習、清掃、それぞれが暑い中自分のやるべきことを一生懸命やっていて、刑務所全体で1つの街のような活気のあるところでした。

けれど私が2つの刑務所に大きな差を感じたのはこの部分です。4日に見学した刑務所は「20歳以上の大人の方にも学習を受ける権利がある」ということです。そこでは沢山の大人の方々が、必死に先生の話聞き、授業を受けていました。スタッフの方が、授業では2つのレベルにわかれている、下のレベルの方に未成年より大人が多く、上のレベルの方に大人より未成年が多いと教えてくれました。学校に行けず学習する機会をなくして大人になってしまった人が多くいるのです。そのような人が学習する機会をバタンバンの刑務所で設けて欲しい、と強く思いました。

その後、若者の家に行きました。もう、若者の家のみんなとはお別れです。

スレイピアップにもう1度インタビューをしました。アンコール・トムインタビューでは、自分が質問することから逃げてしまいました。聞くことで相手を傷つけてしまうのではないかと、そんなことが頭の中で膨らんで、聞くことができませんでした。けれど私には「友情のレポーター」として聞く使命があるのです。アンコール・トムでは聞くことのできなかつたこと、知りたいと思ったことを質問しました。家庭のこと、母親、父親のこと、過去のこと…。スレイピアップの母は、タイに働きに行っているようで、家では姉が農業をして、家計を支えているそうです。スレイピアップの父はスレイピアップが幼く、記憶もあいまいなころに亡くなってしまいました。父がいない分ピアップは働いて家計を助けなければなりません。けれども学校へ行って勉強がしたかったため、姉妹の住んでいる家を離れ、ホームランド、そして若者の家に行くことを決断したそうです。今、ピアップは先生になる夢をかなえるために学校に通い、一生懸命勉強をしています。

いろいろな感情が込み上げてきました。

スレイピアップが抱えていた現実、とても大きい。

大変で辛い過去について話してくれてスレイピアップに私は「話を聞かせてくれてあ

りがとう。スレイピアップはとても大きな壁を乗り越えてきて、本当に強いと思う。たくさんの経験があるからこそ、そんなにも人に優しいんだね。」

そう伝えると、スレイピアップは泣いてしまいました。きっとその理由は1つだけではないはずです。スレイピアップは初めて会った時からいつも笑顔でした。でも、その笑顔の裏につらい過去やさみしさを抱えながら生活をしていたのです。そんなスレイピアップの姿を見て私も泣いてしまいました。近くにいたソッチェが私たち2人の姿を見て、ペーパーをそっと差し出してくれました。「泣かないで」とスレイピアップが私の涙を拭いてくれました。

私が勇気をもらってばかりだ。

最後のお別れ、とても悲しくてもっと長く一緒にいたいと思いました。KnKの若者の家のみんなが、私たちに手紙を書いてくれました。そしてたくさんの子が私に髪飾りやストール、指輪、キーホルダーをプレゼントしてくれました。買うものよりもずっとずっと心に残る大切なお土産になりました。もの以外にも若者の家のみんなには、笑顔の大切さ、優しさ、友情、たくさんのことを教えてもらいました。

笑顔でお別れをするつもりだったけれど、泣いてしまいました。するとみんなが私に「スマイル！スマイル！」と声をかけてくれました。

若者の家のみんなと過ごした4日間、本当に沢山笑って、楽しくて、あっという間でした。

若者の家のみんな オークン！！(ありがとう)

KnKの若者の家のみんなとお別れをして、バタンバンのマーケットで夕飯を食べることになりました。そこでは、観光で来る人が多いためお金などをもらうことができるのかストリートチルドレンを多く見かけました。ストリートチルドレン、という日本では見ることもない現実はどうしたらいいのか戸惑いました。私は食事をしている最中にスタッフの方々に1つ質問をしました。

「路上で暮らす子どもたちにお金を欲しがられたらあげますか？」

スタッフの方々の答えは人それぞれでした。あまりあげないという方、あげることも多い方 もちろん状況にもよります。けれど私には1つ疑問が残りました。

ストリートチルドレンにお金をあげることによって成り立ってしまうストリートチルドレンの世界。けれど、もしだれもお金をあげることがなくなったら今、路上で生活をしている子どもたちはどうになってしまうのか。結局、あげることもあげない

こと、どちらが正しいのかという答えにはたどり着きませんでした。

もっと知ることが大切だし、知りたいと思いました。
そして沢山のの人にストリートチルドレンを知って考えて欲しいのです。

「ストリートチルドレンがいなくなる世界を」

テーブルに座ろうとしたとき、私は持っていたノートを落としてしまいました。すると後ろから声をかけられて「落ちたよ」というように教えてくれました。その男性は子どもを抱いていて、その人には足がありませんでした。

「オークン」とお礼を言うとその人はにっこりと笑ってくれました。

テーブルのそばに何人かのストリートチルドレンが集まってきました。「何歳？」と尋ねると「15歳」と答えが返ってきました。少し驚きました。もう少し年齢が小さいと思っていました。小学校3年生くらいに体は小さく、とても細い、足元を見ると裸足。そんな現実が目の前にあることがなんだか、なんだか信じられませんでした。

中に1人、トロンとした優しい目をした男の子がいました。その子と目が合うとニコッと笑ってくれました。

そのこの姿を見てKnKのスタッフの方が「あの子は、きっと薬をやっているよ」と聞いたとき、驚きとショックで言葉が出ませんでした。私はただ、その子の姿を見ていました。カンボジアなどの国では、空腹を紛らわすために食べモノよりも安く手に入る薬に手を出してしまう人が多くいます。そして、一度薬を使用すると、やめることも困難になります。そんなことを耳にしたことがあったな、と考えていると、その子は友だちから煙草をもらい火をつけて吸い始めてしまいました。その子にとっては当たり前なのかな、

そう思うと、胸がギュッと締め付けられるような気持ちになりました。

4月4日（8日目）

若者の家で暮らすソットランの家庭訪問に行きました。1年に1度くらいしか家には帰らないそうで久しぶりに家に帰るソットランの表情は、とても明るくて、嬉しそうに感じました。

そこでソットランにもう一度話を聞いてみることになりました。

ソットランは数年前にタイに不法な形で侵入し、そこで働いていた過去があると聞きました。そのことをソットランの口から聞いたとき、ショックでした。不法侵入というのはいけないこと、そんなことは分かっていたはずですが。

「毎日、警察に捕まるのではないかと恐怖でいっぱいだった。」

ソットランは私と同じ位の年で、どれほどの恐怖を感じ、生きていたのか。もちろん、ソットランの家族もです。けれど、当時のソットランにはその選択肢しかなかったと言います。タイに行けば、働いて収入を得て、生きていくことができるから。

ソットランは警察につかまり、トランジットセンターというところに保護されました。そこには、人身売買被害にあった子どもから大人まで保護されます。未成年の人数は、年間 200 人程で、その数は年々増加しているそうです。そしてこれからの生活場所を探したりするそうです。

もちろん家庭に帰れるのであれば家庭に、家庭に戻るのが難しい状況であれば KnK などの NGO の団体の施設で、生活をするそうです。トランジットセンターで、ソットランは勉強をするために KnK 若者の家で生活することを決断しました。ソットラン、母親とともに「今、KnK という安心して生活できる場所があってよかった」と言っていました。

そして夕方ポイペト（タイの国境付近）に到着し、国境を越えてタイに入国しました！！

日本では国境が陸続きである感覚が全くないので、初めて歩いて越える国境はなんだか不思議でした。国境付近は多くの人で賑わっていました。毎日カンボジアからタイに国境を越えて働きに行く人も沢山いるそうです。

4月5日(9日目)

タイのマーケットに行きました。マーケットには沢山の物が売っていて、広くてまるで迷路のよう！！マーケットではカンボジアからタイに来て働いている人も多くいました。その中には私と同じ位の年齢で学校へ通わず、仕事を手伝っている女の子もいました。その子の姿はとても堂々としていて、大人っぽく、自分と年が近いと知って驚きました。

そしてタイから歩いて国境を越えて再びカンボジアに、そこから車でシェムリアップへと戻ってきました。シェムリアップでは、体調不良でしばらくお休みしていた要が、KnK 若者の家の卒業生であるシナットにインタビューをしました。その場にはもう 1 人卒業生のロウも来てくれました。

シナットは今ホテルの受付の仕事をしています。今は大学に通いビジネスを学び、将来はビジネスマンになりたいと言っていました。シナットの家庭は、金銭的に厳しく、親からの暴力などがあったそうです。そして、家を出されてしまいました。「なぜ？」

とあってとても悲しかった」とその時の心境を話してくれました。仕事はなく、路上を歩きまわるようになりました。

そんな時友人からKnK 若者の家の存在を知り、勉強がしたかったため生活することを決めました。最初は「ストリートチルドレンの自分を受け入れてくれる？」という不安もあったそうですが、若者の家のみんなは声をかけてくれて若者の家はシナットにとって、とても居心地の良い場所となったそうです。

そして若者の家を卒業して、大学に通うためにシムリアップに来たシナット。最初の頃は、食事や住居など自分のことは全て自分でやらなければならない状況にとても戸惑い、苦勞も多くあったと言います。今は自分で社会人の一員として活動し、充実した日々を送っているそうです。

もともと路上で暮らしていた子どもが、沢山努力をし、自立をしていることは本当に素晴らしいことだと思います。そしてKnKのように勉強や生活をサポートする助けの手の大切さ、というのを改めて感じました。

私はカンボジアで過ごした10日間、沢山の現実を見て、聞いて、肌で感じて、知ることができました。目に映る日本では見ることの出来ない景色、楽しく流れる音楽、体が溶けてしまいそうなくらいの暑さ、言葉では表し切れないほどの沢山の思い出が頭の中によみがえってきます。

中には目をそむけたくくなるような辛い現実もありました。けれどその現実の中で生きている彼らはとても強く、笑顔でした。そして、人は、家族、友だち、親戚など人とつながり、支えあって生きているということを強く感じました。人は誰かがそばにいるから笑うのです。そして笑顔が明日を生きるパワーを作っているのかもしれない。

カンボジアって貧しい国？

日本と比べると経済的にも遅れていて決して裕福な暮らしではありません。支援が必要な場所や子どもたちも沢山います。けれどもカンボジアに住む人々には確かに心の豊かさがあるのです。そして笑顔で溢れています。物やお金があることだけが幸せではない。

人と人がつながって笑いあって感じる幸せ。それはきっとどこに行っても共通する幸せであると、私は思います。

相手への思いやりと笑顔があれば、人と人とはつながっていく。

2013年 春休み友情のレポーター 水谷 涼香